

2023(令和5)年上半期の わが国周辺の漁海況の特徴について

目次

要約ー2023年上半期のポイント	1
1. わが国周辺の海況	3
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	8
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ	10
(2)さば類	11
(3)マアジ	11
(4)カツオ	12
(5)ビンナガ	13
(6)スルメイカ	14
(7)アカイカ	15

2023年7月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約－2023年上半期のポイント

● 総括

- ・黒潮大蛇行が今期も継続し観測史上最長となった。海面水温は、北部太平洋や日本海中央部を中心に高めであった。特に、常磐～三陸沖合では黒潮続流が著しく北偏し、海洋熱波が生じた。
- ・全国主要 117 港における平均価格は前年同期比 123%の 230 円/kg で、2010 年以降で最高価格であった。この原因として、低調だった水揚量に加えて輸入水産物の価格高騰や燃油価格の高騰などが考えられる。
- ・さば類やスルメイカの水揚量の減少傾向が続く一方、マイワシとビンナガは好調で、カツオも今後期待できる状況であった。

● わが国周辺の海況

- ・日本近海海面水温は、北部太平洋や日本海中央部を中心に近年(2011～2020 年平均)より高めで推移したが、関東以南では黒潮流軸の離岸、強風や日射量の減少などの影響で低めの海域もみられた。
- ・黒潮大蛇行は今期も継続し、観測史上最長となった。
- ・黒潮域の海面水温は、熊野灘～遠州灘周辺では暖水波及や黒潮流軸接岸の影響で近年より高い状態が続いた。一方、四国沖は春季以降、黒潮流軸離岸の影響で近年より低めであった。
- ・親潮の勢力は期間を通して平年(1993～2017 年の平均)より弱めであった。また、三陸沖～道東沖では黒潮続流が著しく北偏し(過去最北)、続流からの暖水波及の影響で海洋熱波の状態が続いた。そのため、三陸沖～道東沖の海面水温の近年偏差は四季を通して近年最高であった。
- ・対馬暖流の勢力は、期間を通して平年より強めで、流路は隠岐諸島北沖で蛇行して大和堆付近を通過することが多かった。このため海面水温は、大和堆を含む日本海中央部で近年より高めとなることが多かった。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・全国主要 117 港における 2023 年 1～5 月の調査対象全魚種の累計水揚量は、前年同期比 94%の 70 万 5 千トンで、2015 年以降で最低となった。平均価格は前年同期比 123%の 230 円/kg で、現在と同じ規模で調査を開始した 2010 年以降で最高価格であった。
- ・平均価格は、魚種別にみても前年同期を上回ったものが多かった。産地の水揚量が低調であったことに加え、円安やロシアのウクライナ侵攻の継続による輸入水産物の価格高騰や燃油価格の高騰などの影響が示唆される。
- ・家計調査(総務省)によると、生鮮魚介類の購入数量は 2021 年以降減少傾向にあり、水産物の価格高を反映したものと考えられる。

● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 32.9 万トン(太平洋側 28.1 万トン、日本海側 4.8 万トン)に達しており、前年同期(30.9 万トン)を約 2 万トン上回った。
- ・太平洋側では体長 17～19cm(2、3 歳魚)主体に好漁で、20cm 以上(4 歳魚以上)も混じった。
- ・日本海側では隠岐海峡周辺での漁獲が好調であり、境港では 3 月に約 2 万トンの水揚げがあった。
- ・境港水揚物の体長は 18cm 前後(1 歳魚)であった。6 月中旬ごろから体長 18～20cm(2 歳魚)の水揚げがあった。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 11.2 万トン(太平洋側 4.3 万トン、東シナ海・日本海側 6.9 万トン)で、前年同期(13.5 万トン)を下回り、2019 年以降で最も少なかった。

- ・太平洋側では、前々年からの不漁が続き、1～3月のまき網による水揚げがほとんどなかった。
- ・東シナ海・日本海側では、1～3月に対馬海域主体に漁獲され、1～6月に隠岐海峡周辺で漁獲が続いた。

● マアジ

- ・マアジの全国主要港における本年6月末現在の水揚量は3.1万トン(太平洋側0.3万トン、日本海側2.8万トン)で、前年同期(4.8万トン)を下回った。
- ・日本海側では、4月ごろから隠岐海峡周辺で漁獲が続いたが、境港における5、6月の水揚量は前年を下回った。
- ・東シナ海側では、5～6月は中南部海域主体に対馬海域でも漁獲が続き、水揚量は前年を下回った。

● カツオ

- ・竿釣りによる生鮮カツオの1～6月の水揚量は約1万トンで、過去4年平均の92%だった。
- ・4月までは南西諸島周辺海域が主漁場で、5月以降は高知沖～伊豆諸島沖に移動した。6月は房総～東北海域でビンナガ主体となり、カツオの漁獲量は減少した。
- ・本年は小型カツオが多く、伊豆・小笠原列島沿いルートから東北海域に北上する小型カツオの群れが順調に来遊しているとみられる。
- ・竿釣りによる生鮮カツオの全国月平均価格は395～456円/kgと高値で推移した。まき網による生鮮カツオも380～450円/kgで竿釣りと同程度の高値で推移した。

● ビンナガ

- ・5月中旬から近海竿釣り船によるビンナガ漁が本格化し、房総～東北海域に漁場が形成された。
- ・全国の生鮮ビンナガの1～6月の水揚量は約2万トンで、不漁だった前年の約2倍で、好漁だった2020年の約7割であったが近年では好漁だった。
- ・全国平均価格は1～5月は448～551円/kgと高値で推移し、不漁だった前年並だった。6月は398円/kgとやや落ち着いたが、近年では高値だった。

● スルメイカ

- ・全国主要港における本年の生鮮スルメイカの水揚量は6月末現在1.9千トンで、前年同期(3.8千トン)の51%、2018～2022年同期の平均値(5.2千トン)の37%であった。
- ・例年5～6月に能登半島沖に主漁場が形成される小型いか釣り船による金沢港の水揚量は、1～6月の累計が0.2千トンで、前年同期(1.4千トン)の14%、2018～2022年同期の平均値(2.1千トン)の10%であった。一方、底曳網主体の石巻では1～6月の累計水揚量が440トン(前年比380%)など、三陸海域では前年より好調であった
- ・中型いか釣り船は、冷凍スルメイカの大部分を生産する。本年上半期の冷凍スルメイカの水揚量は0.3千トンで、前年(0.5千トン)の66%、2018～2022年同期の平均値(1.0千トン)の31%であった。

● アカイカ

- ・本年1月初旬に9隻の中型いか釣り船が三陸近海の冬季アカイカ操業を試みたが、群れが薄く十分な水揚げ量確保には至らなかった。
- ・5月中旬から北太平洋西経海域で大型いか釣り船1隻、中型いか釣り船24隻がアカイカ操業を開始し、7月現在も操業を続けている。
- ・今期、北太平洋西経海域に出漁した中国のアカイカ釣り船は15隻で、7月現在も操業中である。

1. わが国周辺の海況

(1) 海域別海況概要

2023 年上半期の海面水温は、期間を通して常磐～三陸海域や日本海南部～中部を中心に近年(2011～2020 年の 10 年平均)より高めで推移し、三陸沖では 5 月中旬に近年の最高を記録した(図 1)。

1) 黒潮域・東シナ海

2017 年 9 月に始まった黒潮大蛇行は今期も続き、継続期間は 5 年半を超え、観測史上最長を更新中である。

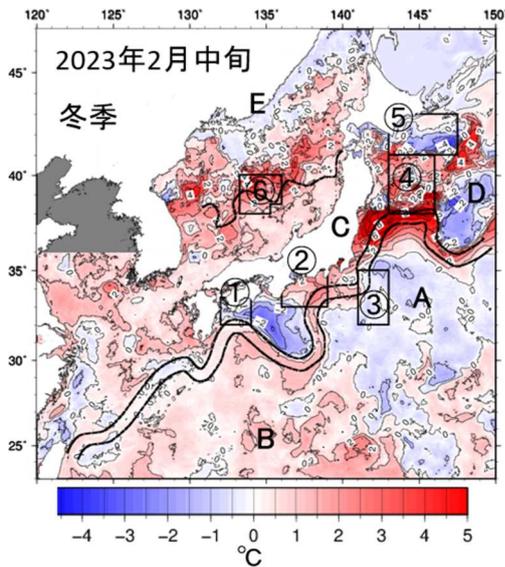


図 1-1. 2023 年 2 月中旬の海面水温の近年差

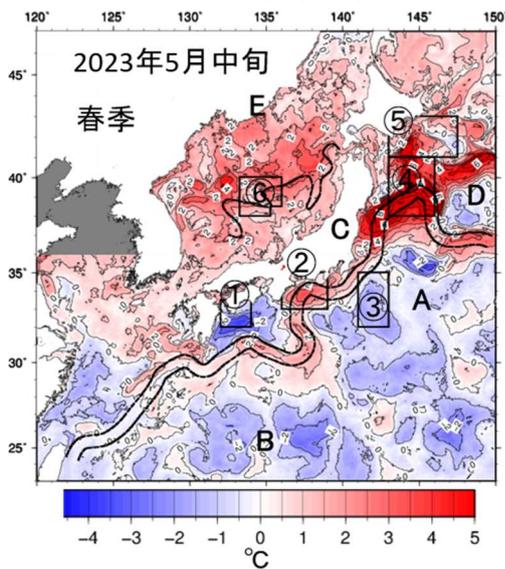


図 1-2. 2023 年 5 月下旬の海面水温の近年差

冬季の黒潮流路は四国沖で緩やかに屈曲した後、潮岬の南沖で 30° N 以南まで大きく南下し、遠州灘

沖で緩やかに屈曲する流路で安定した(図 2-1)。4 月以降は四国沖で黒潮流軸の離岸が始まり、春季の流路は四国～潮岬沖では不安定であった。しかし、熊野灘では黒潮流軸の接岸が続き、伊豆諸島付近では安定した流路であった(図 2-2)。

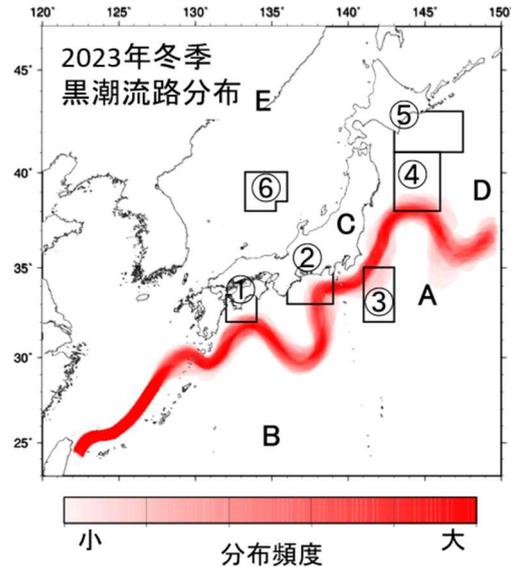


図 2-1. 2023 年冬季の黒潮流路分布(海上保安庁海洋情報部の海流 GIS データを使用)

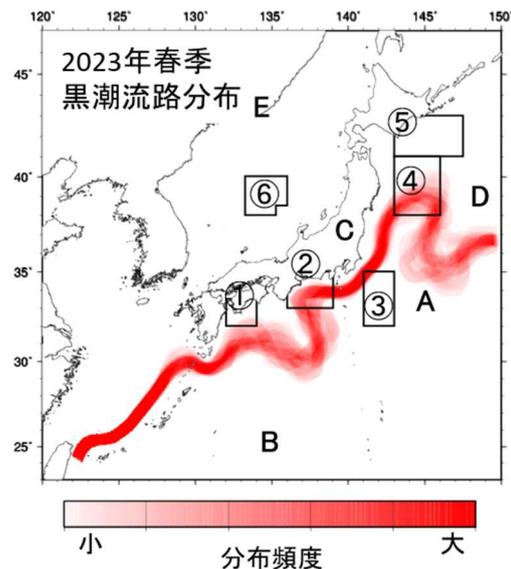


図 2-2. 2023 年春季の黒潮流路分布

四国海域(図 1-①)の海面水温は、冬季後半～春季前半に黒潮流軸の屈曲部が一時的に北偏して東進した影響で、近年より高めの時期もみられたが(図 3)、それ以外の時期は黒潮流軸の離岸が進み、近年より低めであった。遠州灘～熊野灘(東海)海域(図 1-②)の海面水温は、遠州灘沖の屈曲部からの暖水波及や黒潮流軸が熊野灘に接岸した影響で、

近年より1~2°C高めの状態が続き(図3)、特に5月以降は黒潮流軸の接岸が著しく、3°C以上高めの海域もみられた(図1-2)。関東南東沖海域(図1-③)や関東東沖(図1-A)の海面水温は、冬季には季節風等の影響で近年より低めであったが、冬季後半は季節風が弱まり高めに転じた。春季も風が強く日射量が少なかった影響で近年より低めで推移した。沖縄東沖~本州南方沖(図1-B)の海面水温は、冬季はおおむね近年より高めであったが、春季は風や日射量が少なかった影響で低めの海域が広がった。

東シナ海の海面水温は、気象の影響による変動が大きく、冬季は風が弱く気温が高かった影響で近年より高めの海域が多かった。春季は風が強く気温が低かった影響で南部を中心に1~2°C低めの海域が広がった。一方、北部は風が弱く気温が高かった影響で1°C前後高めであった。

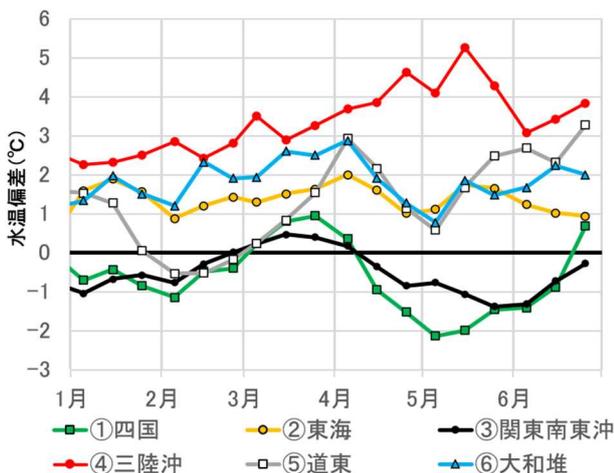


図3. 海域毎の海面水温の近年差(各海域の範囲は図1-①~⑥参照)

2) 親潮域・混合水域

親潮の勢力(100m深で5°C以下)は、前年秋季に引き続き近年(1993~2017年の平均)より弱い~かなり弱い状態が続いた。冬季は一時的に三陸沿岸まで親潮系水が南下したが、親潮第一分枝はおおむね道東沿岸に停滞した。一方、黒潮続流は前年秋季から北偏が続き、常磐を接岸しつつ北上して岸寄りの最北上部(峰)は冬季に仙台湾沖付近まで北上した(図2-1)。春季はさらに岸寄りの峰の北上が進み、春季後半には40°N以北に達して過去に例のない北偏となった(図2-2)。

三陸のはるか沖合(図1-D)や冬季の道東海域(図

1-⑤)の海面水温は、近年より低めの海域がみられたが、常磐北部海域(図1-C)から三陸沖海域(図1-④)にかけての海面水温は、黒潮続流の影響で期間を通して近年より高めの状態が続いた。黒潮続流は期間を通して常磐北部海域を通過し、春季には40°N付近まで北上して三陸沖海域を通過したため、この時期は最大6~8°Cと著しい高めの海域がみられ、海洋熱波の状態になった。道東海域の海面水温も春季以降、黒潮続流の峰から波及した暖水の影響で、近年より2~4°C高めであった。

3) 日本海

対馬暖流の勢力は、前年秋季に引き続き近年より強めの状態が続いた。対馬暖流の流路は、冬季は山陰西部で蛇行して南下し、隠岐諸島沖を北上して大和堆付近に達した後、北陸~東北ではおおむね離岸した。春季は隠岐諸島北沖でS字状に蛇行して大和堆付近を通過し、北陸~東北では離岸した。このため、朝鮮半島北部沖から中央部の海面水温は広範囲で近年より高めの状態が続いた。大和堆海域(図1-⑥)の海面水温も期間を通して近年より高めで推移し、春季の初めには3°C弱高めになった(図3)。

日本海北部海域(図1-E)の海面水温は、冬季には季節風等気象の影響で、沿海州付近を中心に近年より低めの海域が広がったが、春季以降は日射等の影響で上昇し、2°C前後高めの海域が広がった。

(2) 黒潮大蛇行の南下と黒潮続流の北上およびその影響

1) 黒潮大蛇行と黒潮続流の変動の経過

前述のとおり、2017年9月に始まった今回の黒潮大蛇行は観測史上最長となっている。また、その形成過程は、詳細な観測結果のある1975年から2004年の間に発生した大蛇行とは異なった様子を見せた。2004年以前の大蛇行形成過程は、川辺(2003)がまとめたように、九州南方沖の小蛇行が4か月ほどかけて東進し、遠州灘沖の冷水塊と相互作用して非大蛇行離岸流路(N型流路)から大蛇行流路(A型流路)に移行した。また、大蛇行移行前は32°N以北にあった最南下部の緯度が小蛇行の東進と共に数か月かけて黒潮大蛇行の最南下緯度の定義である32°

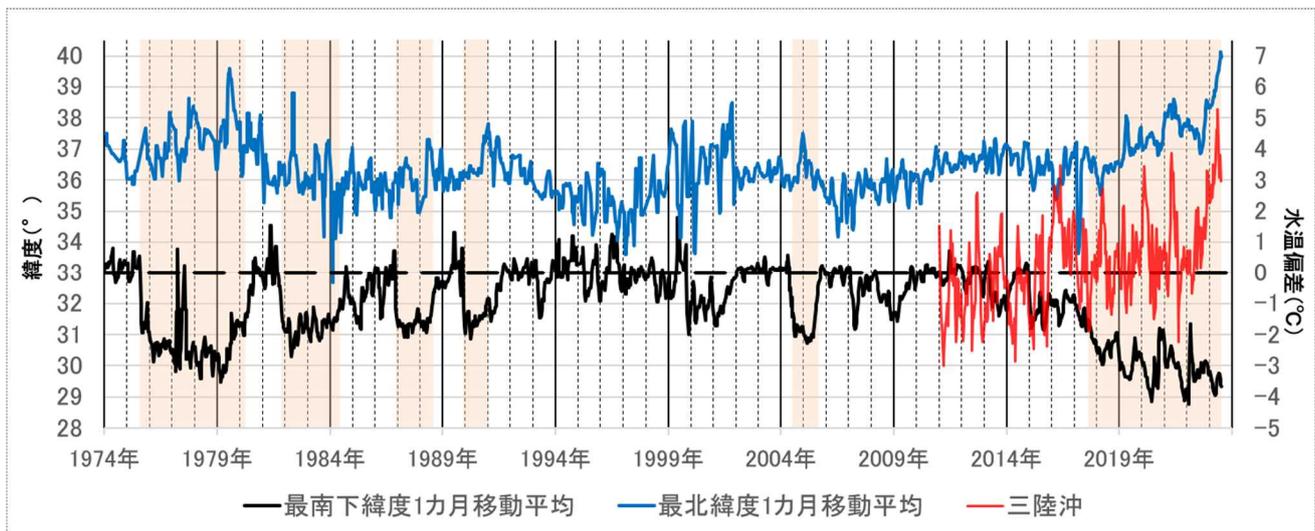


図 4. 1974～2023 年における黒潮蛇行最南下緯度と続流最北緯度および、三陸沖海域の海面水温の近年偏差(三陸沖海域海面水温近年偏差は 2011 年～)(網掛けは黒潮大蛇行期間)

N 以南に達して大蛇行に移行した(図 4)。一方、今回の大蛇行の形成過程は、2017 年冬季後半に九州南沖に小蛇行が形成され初め、過去の大蛇行と同様に東進して夏季後半に四国～紀伊半島沖に達して大蛇行に移行したと考えられるが、蛇行最南下部の緯度は、非大蛇行離岸流路(C 型流路)主体であった 2017 年の年初にはすでに南下が始まって 32° N 以南に達しており、大蛇行移行後の 2018 年冬季まで緩やかな南下が継続した。すなわち、大蛇行移行を挟んで長期間南下傾向が続いた。その後、蛇行最南下部の緯度は、概ね 29～31° N の範囲で変動している。

川合(1899)および Sugimoto and Hanawa(2012)は、2004 年以前の大蛇行発生時に黒潮続流が北上したことを報告している。今回の大蛇行では、黒潮続流の岸寄りの最北上部(峰)は、最南下部の南下開始から約 1 年遅れて緩やかに北上を始め、2022 年後半には北上が顕著になり、2023 年 6 月下旬には三陸沖の 40° N を超えた(図 4)。これは、海上保安庁海洋情報部の海流 GIS データ(2015 年～)や MIRC 黒潮流軸データセット(1955～2014 年)がある 1955 年以降では最北の記録であり、歴史的な北偏といえる。

2) 三陸・道東の海面水温変動とその影響

三陸沖(図 1-④)の海面水温の近年(2011～2020 年)偏差(図 4)は、2015 年まではおおむね±2°C の範囲で変動を繰り返していたが、2016 年以降は 3°C 以上の高偏差になり、いわゆる海洋熱波の状態が

頻発した。2022 年冬季は親潮の勢力が強くと一時的に負偏差となったが、2022 年春季以降 2023 年 6 月現在も正偏差が続いており、2022 年秋季からは黒潮続流の北偏が強まり、海面水温の正偏差が著しく拡大した。

2023 年 5 月中旬には、黒潮続流の北上に加えて黒潮続流からの暖水波及も生じたため、常磐～三陸沖合の海面水温は広範囲で近年偏差が 4～8°C に達し(図 1-2)、三陸沖海域(図 1-④)の近年偏差は近年最高の約 +5.3°C を記録した(図 4)。

この三陸海域の高水温の一因として、2023 年春(3～5 月)の日本周辺の気温が 1898 年の統計開始以来最高を記録したことが指摘されている。しかし、6 月中旬の気象庁の「NEAR-GOOS の TESAC 報」による 39° 30′ N 付近の三陸沖の 39° 30′ N に沿った下層観測(図 5)では、表層から水深 200m まで塩分が 34.2 以上(図 6)、水温が約 10～20°C(図 7)の高温高塩分の水塊が観測された。三陸～道東海域では塩分 33.6 以上、水温 10°C 以上であれば黒潮系水とみなせるため、この高温高塩分水は黒潮続流の北偏が主な要因であると考えられる。

この高温高塩分水塊では沖合側の 50m 付近に塩分 34.4～34.5(最大 34.51)、水温が 14～16°C の黒潮系水塊も観測された。海上保安庁海洋情報部の「J-DOSS」の 1990～2019 年のこの海域の 50m 深の下層観測データでも塩分 34.4 以上、水温が春季に 14°C 以上に達する高温高塩分水が観測されることは極めてまれであった。「J-DOSS」の下層観測デー

タには三陸沖の暖水渦による高温高塩分の水塊のデータも含まれている可能性も考えると、今年の春季のように40°Nに達するような黒潮統流の北偏はまれな現象であると考えられる。

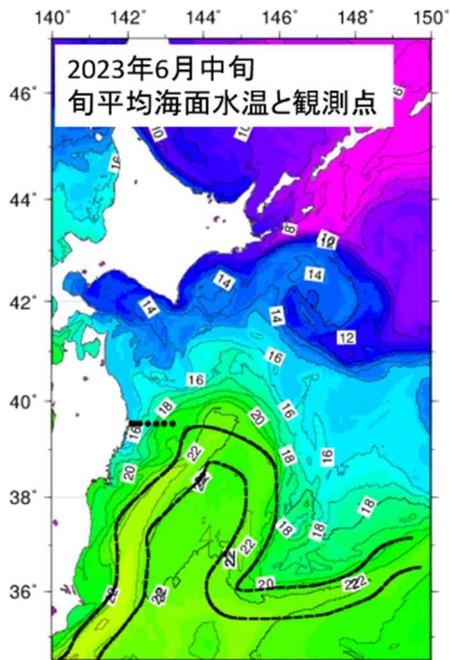


図5. 2023年6月中旬の平均海面水温と観測点

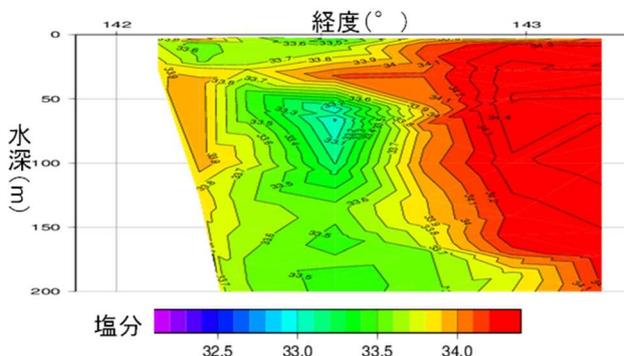


図6. 図5の観測点における塩分断面

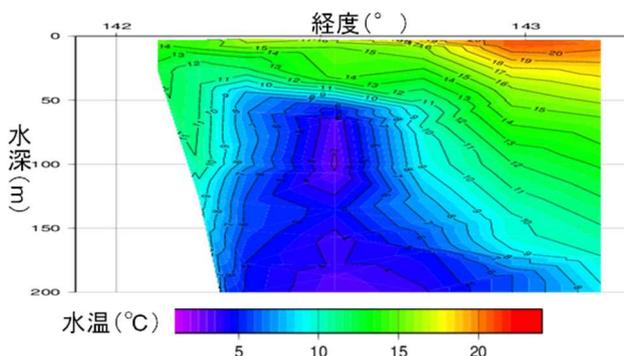


図7. 図5の観測点における水温断面

道東海域の海面水温の近年偏差も、6月下旬現在は約+3°Cと高く、気象庁の「NEAR-GOOSの

TESAC報」でも6月上旬に約50mで塩分34前後の黒潮系水の影響を受けたと考えられる水塊が観測されており、黒潮統流からの黒潮系暖水の波及が推測される。

このような黒潮統流の北偏とそれに伴う著しい高水温(海洋熱波)は、近年のサンマやマサバの不漁との関連が指摘されている。現在操業中の道東のまき網漁場や今秋のサンマ漁場の形成に、大きな影響を及ぼすと考えられ、今後の海況と漁況に注意が必要である。

(海洋事業部 矢野泰隆)

◎トピックス エルニーニョの発生と漁海況への影響

本年6月、気象庁から「エルニーニョ現象が発生しているとみられ、今後、秋にかけてエルニーニョ現象が続く可能性が高いこと」が発表された(図8、気象庁エルニーニョ監視速報(No.369) https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/el_nino/kanshi_joho/kanshi_joho1.html)。

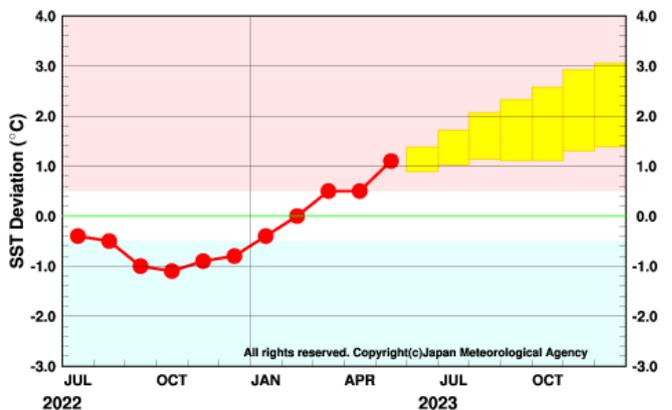


図8. エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差の5月までの経過(折れ線グラフ)と大気海洋結合モデルから得られた今後の予測(ボックス)(出典:気象庁エルニーニョ監視速報(No.369) 2023年6月9日)

エルニーニョは太平洋熱帯域における大気-海洋の相互作用の海洋側の現象であり、南東貿易風が弱まることにより、太平洋熱帯域の中央部~南米北部沖の海面水温が平年よりも0.5~3°C上昇する。今回は、エルニーニョとは反対の状態であるラニーニャあるいは平年並みの状態が続いてきたなかで、2018/19年以来のエルニーニョであり、動向が注目

されている。

エルニーニョが漁海況に及ぼす影響としては、南米ペルー沖のカタクチイワシ(アンチョビー)の不漁と、それを原料とする魚粉生産量の減少が有名である。最近、ペルー沖のカタクチイワシについて資源状態を確認するための試験操業が行われたところ、未成魚の割合が高いため試験操業が中止され、本操業解禁の目途も立っていないことが報道された。今回のエルニーニョとの関係は明らかではないが、ペルー沖のカタクチイワシの不漁と魚粉の減産がわが国を含め世界の浮魚漁業や給餌養殖業に及ぼす影響は大きい。「トピックス 魚粉価格の高騰」でも紹介しているように、最近のわが国の生鮮マイワシの価格は輸入魚粉の価格と連動している。今後のエルニーニョの動向とともに、ペルー沖のカタクチイワシ漁や世界の魚粉の需給関係の動きにも注意が必要である。

こうした魚粉を通じたつながりに加えて、エルニーニョ発生時には、ニューギニア沖の暖水域の位置が東にずれるため熱帯域でのカツオ漁場が東へ移動することや、北赤道海流がフィリピン沖で黒潮と赤道反流に分岐する位置が北上し、日本沿岸へのシラスウナギの来遊量が減少することが指摘されている。

一方で、わが国周辺の漁海況に及ぼすエルニーニョの直接的な影響は明らかではない。しかし最近の研究により、ペルー沖が高水温になる通常のエルニーニョ(東部太平洋エルニーニョ)は、大気のテレコネクション(遠隔結合)を通じて冬季のアリューシャン低気圧を強める効果を持ち、わが国東方沖合の海面水温が平年より低め、北米沿岸では高めとなる傾向があると言われている。また、太平洋中央部が高水温になる場合(中央太平洋エルニーニョ/エルニーニョモードキ)には、冬季の北太平洋高気圧の勢力に影響が及び、海面水温が北太平洋の北東部では平年より高め、南西部で低めとなるパターンを示す傾向があると言われている。さらに、近年は中央太平洋エルニーニョの発生が増加しており、地球温暖化の進行にともないその傾向が強まる可能性も指摘されている。

今後のエルニーニョの動向に注目するとともに、わが国周辺の漁海況の変化にも注意したい。

(顧問 和田時夫)

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

JAFIC が調査している全国主要 117 港における 2023 年 1～5 月の調査対象全魚種の累計水揚量は 70 万 5 千トンで、前年同期(74 万 6 千トン)の 94%と 2015 年以降で最低となった。平均価格は 230 円/kg で、前年同期(187 円/kg)の 123%と、現在と同じ規模で調査を開始した 2010 年以降で最高価格であった。なお、本報告の水揚量と価格は JAFIC「おさかなひろば」による。

表 1. JAFIC 調査港の 2023 年 1～5 月の産地魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較(2022 年 1～12 月の平均価格の昇順に並び、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。)

	1～5月						1～12月 2022年 価格
	2023年		2022年		前年比		
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格	
カタクチイワシ	1,869.1	79	5,355.6	37	35%	216%	43
マイワシ	275,487.8	74	269,118.3	40	102%	183%	45
スケトウダラ	36,071.0	75	55,991.5	58	64%	130%	60
ウルメイワシ	9,952.2	113	4,889.8	77	204%	147%	63
ホッケ	5,229.5	77	5,890.3	50	89%	152%	64
ニシン	3,356.0	95	3,799.6	110	88%	87%	105
さば類	92,945.8	130	116,422.2	117	80%	112%	121
マアジ	27,337.9	266	40,783.5	177	67%	150%	207
マダラ	18,899.0	206	16,964.7	184	111%	112%	233
ほたてがいがい殻付	9,055.8	183	4,319.3	241	210%	76%	233
冷カツオ	65,437.5	316	65,316.7	233	100%	135%	268
ブリ	13,887.7	311	18,364.2	216	76%	144%	268
かれい類	5,128.6	302	5,884.7	245	87%	123%	272
生カツオ	10,493.3	447	11,252.5	344	93%	130%	407
冷キハダ	12,062.5	548	17,534.6	398	69%	138%	488
マダイ(天然)	1,737.9	712	2,924.0	431	59%	165%	526
ビンナガ	13,967.9	469	9,160.5	484	152%	97%	531
サンマ	0.9	349	11.0	397	8%	88%	577
ヒラマサ	264.5	1,012	421.4	563	63%	180%	668
さわら類	388.1	987	901.3	806	43%	122%	731
マカジキ	284.8	866	285.3	702	100%	123%	752
ヤリイカ	1,390.7	848	1,105.4	752	126%	113%	763
生スルメイカ	1,315.6	725	2,003.3	577	66%	126%	763
アキサケ	18.8	921	38.0	1,204	50%	77%	781
ギンザケ(養殖)	3,773.3	778	2,509.1	792	150%	98%	816
マダイ(養殖)	81.3	1,041	207.5	826	39%	126%	880
たこ類	1,245.6	958	1,440.0	766	87%	125%	904
サザエ	83.9	1,039	108.2	957	77%	109%	910
ヒラメ(天然)	799.9	983	655.5	899	122%	109%	947
生キハダ	4,101.5	931	4,399.7	850	93%	110%	963
あなご類	209.8	1,132	231.8	779	90%	145%	1,065
メジマダ(ヨコワ)	193.4	1,260	185.8	1,113	104%	113%	1,067
冷スルメイカ	318.0	1,262	485.1	875	66%	144%	1,080
冷メバチ	8,790.1	954	8,589.2	1,097	102%	87%	1,103
メカジキ	969.8	1,452	920.5	1,281	105%	113%	1,308
生メバチ	1,519.3	1,197	965.7	1,247	157%	96%	1,333
ハマチ(養殖)	74.6	1,288	53.2	1,113	140%	116%	1,334
アカムツ(ノドグロ)	113.0	1,697	156.5	1,334	72%	127%	1,633
ヒラメ(養殖)	5.6	2,104	16.3	1,284	34%	164%	1,654
キンメダイ	847.5	1,603	880.8	1,421	96%	113%	1,701
あまだい類	72.1	2,759	89.2	2,196	81%	126%	2,243
キンキ(キチジ)	326.8	2,523	532.5	1,810	61%	139%	2,278
冷ミナミマグロ	1,607.0	2,848	1,498.1	2,291	107%	124%	2,483
クロマグロ	1,466.7	3,470	1,636.0	2,595	90%	134%	2,548
トラフグ	78.6	4,898	96.8	3,808	81%	129%	4,278
クルマエビ	5.2	5,786	3.4	7,311	154%	79%	5,578
イセエビ	34.0	6,583	38.7	5,525	88%	119%	6,004
あわび類	9.7	7,768	18.1	10,145	54%	77%	10,185
うに類(剥き身)	39.2	9,275	37.0	7,950	106%	117%	13,871

主要 49 魚種の 2023 年 1～5 月の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年同期と比較した(表 1、図 9)。なお、水揚量・価格ともに「前年同期並み」とあるのは増減率 0～5%の場合を示す。水揚量は、ウルメイワシ、マダラ、ビンナガなど 12 魚種が前年同期を上回り、マイワシ、冷凍カツオ、冷凍メバチなどの 7 魚種は前年同期並み、カタクチイワシ、さば類、マアジ、生鮮スルメイカなど 30 魚種は前年同期を下回った。平均価格は、マイワシ、ブリ、冷凍スルメイカ、クロマグロなどの 39 魚種が前年同期を上回り、ビンナガ、ギンザケ(養殖)、生鮮メバチの 3 魚種が前年同期並み、ニシン、ほたてがいがい殻付、冷凍メバチなど 7 魚種が前年同期を下回った。

このように、2023 年 1～5 月は、前年と比較すると全般的に高値基調で、平均価格が前年同期を上回った魚種が多かった。この原因として、水揚量が低調であったことに加え、円安やロシアのウクライナ侵攻の継続による輸入水産物の価格高騰や原油価格の高騰などが考えられる。一方、家計調査結果(総務省統計局)によると、2 人以上世帯の 1 世帯あたりの生鮮魚介類の購入数量は 2021 年以降減少傾向にあった(図 10)。これに対し、購入金額を購入数量で割った平均価格は上昇傾向にあり、生鮮肉や生鮮野菜と比べて生鮮魚介類は価格の上昇が顕著であった。これらのことは、近年の水産物の価格高を反映したものと考えられる。魚価高の状況が続いていることから、消費者の「魚離れ」の増大が懸念され、今後も水産物市況の動向を注視する必要がある。

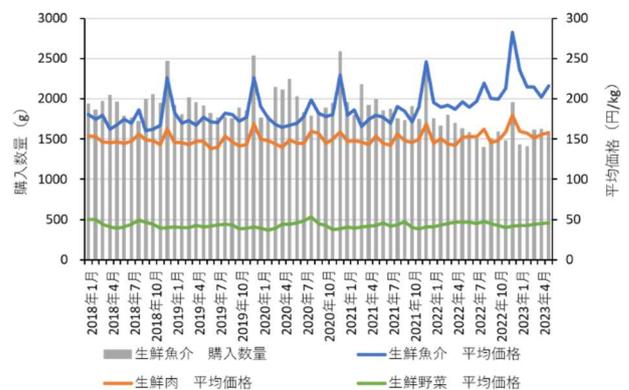


図 10. 1 世帯(2 人以上世帯)あたりの生鮮魚介類の購入数量と平均価格の推移

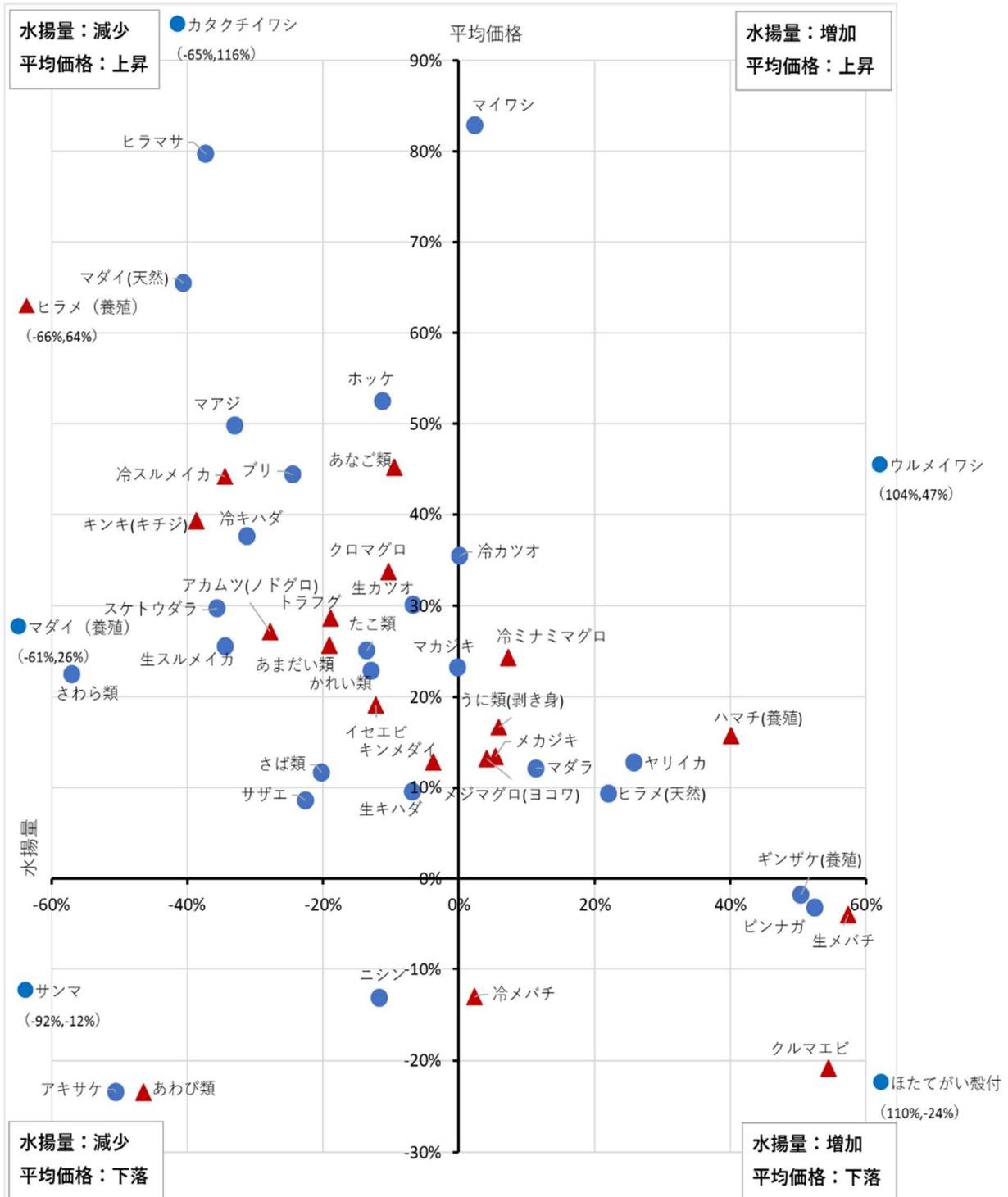


図 9. 主要 49 魚種の水揚量と平均価格の比較(2023 年 1~5 月/2022 年 1~5 月)横軸と縦軸の目盛に記載した%は、2022 年同期比の増減率を示す。▲は 2022 年 1~12 月の平均価格が 1,000 円/kg 以上、●はそれ未満の魚種を示す。目盛の範囲外にある魚種については、水揚量と価格の増減率をカッコ内に示す。

(水産情報部 石山なな子)

3. 魚種別の漁海況・市況

(1) マイワシ

マイワシの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 32.9 万トン(太平洋側 28.1 万トン、日本海側 4.8 万トン)に達しており、前年同期(30.9 万トン)を約 2 万トン上回った(図 11)。太平洋側では体長 17~19cm(2、3 歳魚)主体に好漁で、20cm 以上(4 歳魚以上)も混じった。犬吠埼付近では、1~5 月に好調な水揚げが続いたが 6 月には水揚物の主体が体長 14.5~16cm(1、2 歳魚)と小さくなり、銚子港での 1~6 月の水揚量は前年を約 3 万トン下回った。6 月 6 日に開始された道東沖の棒受網・たもすくい網漁業では 2、3 歳魚主体に体長 20cm 以上(4 歳魚以上)も混じった。道東沖では夏以降も資源量が豊富な 2、3 歳魚主体に水揚げが続き、10 月ごろには 14~16cm(1 歳魚)も水揚げされると考えられる。日本海側では隠岐海峡周辺での漁獲が好調であり、境港では 3 月に約 2 万トンの水揚げがあった。水揚物の体長は 18cm 前後(1 歳魚)であった。6 月中旬ごろから体長 18~20cm のサイズの水揚げがあった。価格は全国的に例年を上回る高い水準であった(図 12)。

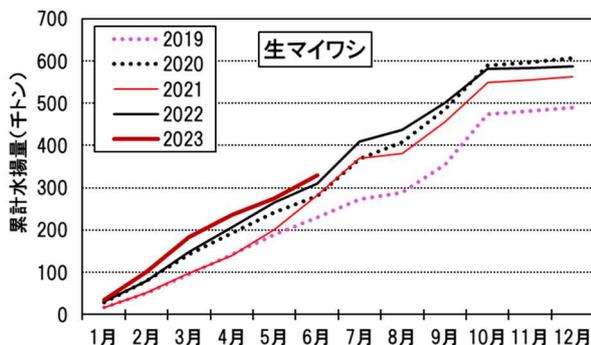


図 11. 2019~2023 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

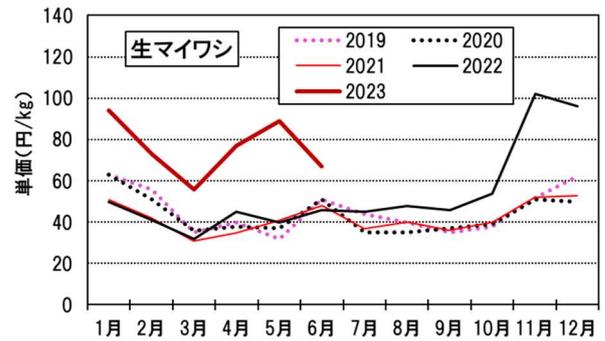


図 12. 2019~2023 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

(水産情報部 源 浩輔)

◎トピックス 魚粉価格の高騰

前述のように生鮮マイワシの単価(kg/円)が前年 10 月から 11 月に急騰し、本年 1~2 月も高値を維持し、3 月に一旦下落したものの、再び上昇傾向にある(図 13)。

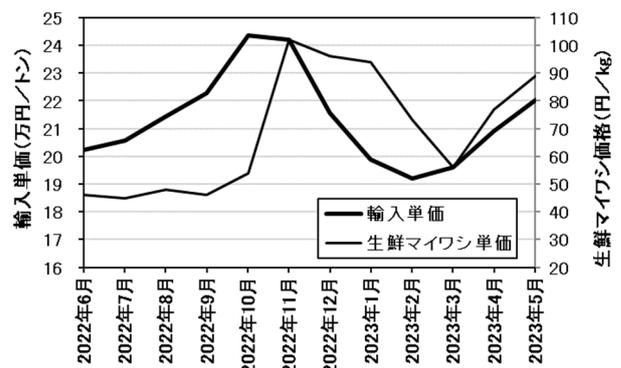


図 13. 2022 年 6 月~2022 年 5 月の日本の魚粉の輸入単価と生鮮マイワシの単価の推移

輸入単価は輸入金額と輸入量から算出(データ出典: <http://www.suisan.or.jp/html/topics.html>)

マイワシの仕向け先は、主に魚粉(フィッシュミール)や缶詰などの加工あるいは冷凍しての輸出である。そこで、日本の魚粉の輸入量と輸入金額から算出した魚粉の単価と生鮮マイワシの単価の推移を図 13 で比較した。これによると、生鮮マイワシの単価は輸入魚粉の単価から約 1 か月遅れで変動してきたが、本年 3 月以降は遅れがなくなった。最近の生鮮マイワシの単価が魚粉の輸入単価に連動していることは明らかであるが、これ以外の要因として、前年秋季以降、さば類が太平洋側で著しい不漁に陥った

め、缶詰原料をさば類からマイワシに切り替えていることも考えられる (<https://www.yomiuri.co.jp/economy/20230221-OYT1T50206/>)。

なお、日本の魚粉の輸入単価を世界の魚粉単価と比較すると、日米の為替レートを考慮しても、2022年7月～2023年1月において、日本の魚粉輸入単価が世界の魚粉単価を上回って推移した(図14)。この原因として、この時期に日本の魚粉入量と金額が増加したこと(図15)に起因した可能性がある。

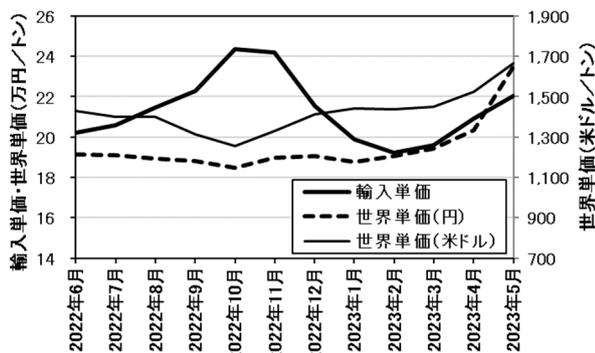


図14. 2022年6月～2023年5月の日本の魚粉の輸入単価と世界の魚粉単価(米ドルベースと円ベース)(世界魚粉データ出典:

<https://fred.stlouisfed.org/series/PFISHUSDM>)

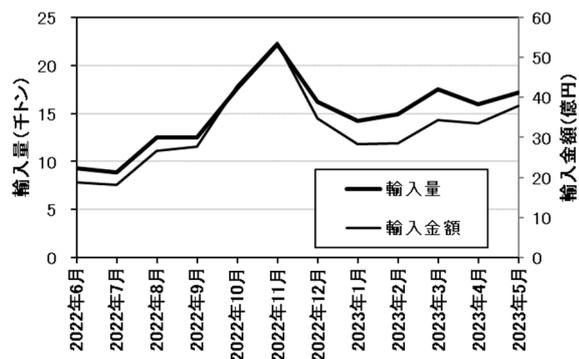


図15. 2022年6月～2023年5月の日本の魚粉の輸入量と金額(データ出典:

<http://www.suisan.or.jp/html/topics.html>)

(水産情報部 谷津明彦)

(2) さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における本年6月末現在の水揚量は11.2万トン(太平洋側4.3万トン、東シナ海・日本海側6.9万トン)で、前年同期(13.5万ト

ン)を下回り、2019年以降で最も少なかった(図16)。太平洋側では、海洋熱波などに起因した前々年からの不漁が続き、1～3月のまき網による水揚げがほとんどなかった。5、6月の北上期には石巻港でまとまった水揚げがあったが、これは沿岸を北上した群が主に定置網や底曳網で漁獲されたものである。11月ごろからは八戸沖～石巻沖にまき網漁場が形成されると期待されるが、漁模様は海洋熱波に影響される。東シナ海・日本海側では、1～3月に対馬海域主体で漁獲され、1～6月に隠岐海峡周辺で漁獲が続いた。1～6月の境港の水揚量は前年を大きく上回った。価格は全国的に近年では高水準である(図17)。

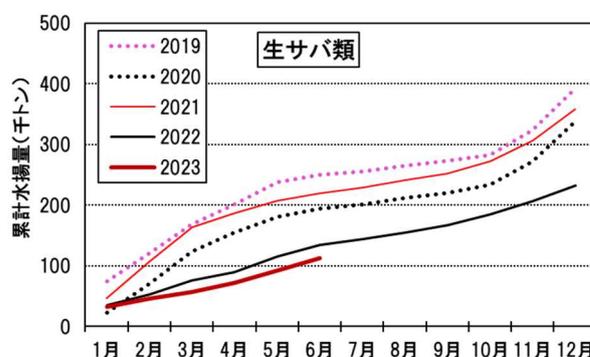


図16. 2019～2023年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

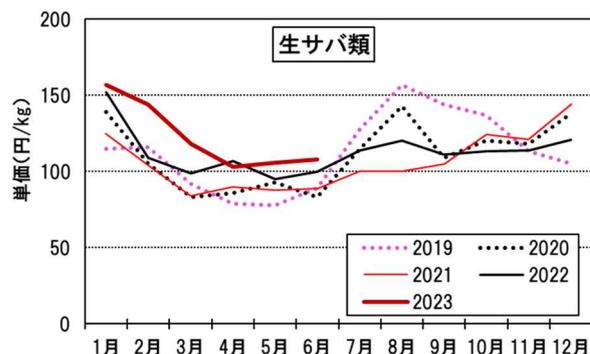


図17. 2019～2023年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

(水産情報部 源 浩輔)

(3) マアジ

マアジの全国主要港における本年6月末現在の水揚量は3.1万トン(太平洋側0.3万トン、日本海側2.8万トン)で、前年同期(4.8万トン)を下回った(図18)。日本海側では、4月ごろから隠岐海峡

周辺で漁獲が続いたが、境港における 5、6 月の水揚量は前年を下回った。東シナ海側では、5～6 月は中南部海域主体に対馬海域でも漁獲が続き、水揚量は前年を下回った。価格は 2 月を除いて高水準で推移し、2022 年を上回った(図 19)。

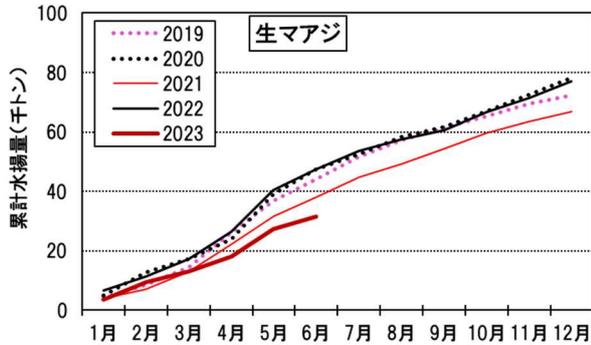


図 18. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

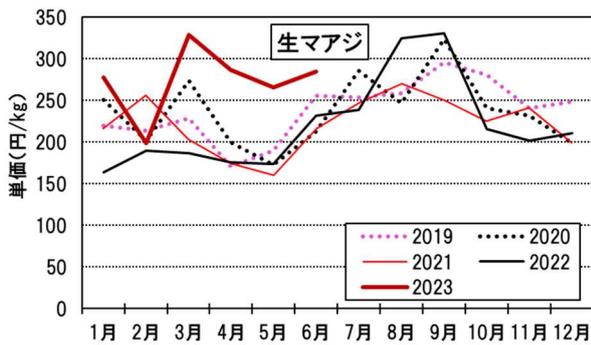


図 19. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

(水産情報部 源 浩輔)

(4)カツオ

近海竿釣り船は例年どおり 1 月末ごろから出漁し、1～2 月の漁場と魚体は中南海域の 150° E 周辺でカツオ特大、小笠原南方と南西諸島周辺でカツオ極小主体で始まり、3 月はカツオ極小主体で南西諸島周辺に集中した(図 20)。また、本年 3 月は小笠原周辺で隻数は少ないものの漁場が形成され、徐々に北上し、3 月下旬には遠州灘から伊豆半島周辺でもカツオ極小主体の漁獲があった。4 月上中旬は引き続き南西諸島に漁場が形成されたが、4 月下旬までには主漁場は熊野灘～伊豆七島周辺に移った(図 20)。5 月の近海竿釣り船の漁場は高知沖～伊豆諸島沖で、カツオ(小)主体を漁獲したが、下旬からは房総

～東北海域でビンナガ主体となったためカツオの漁獲量は減少した。

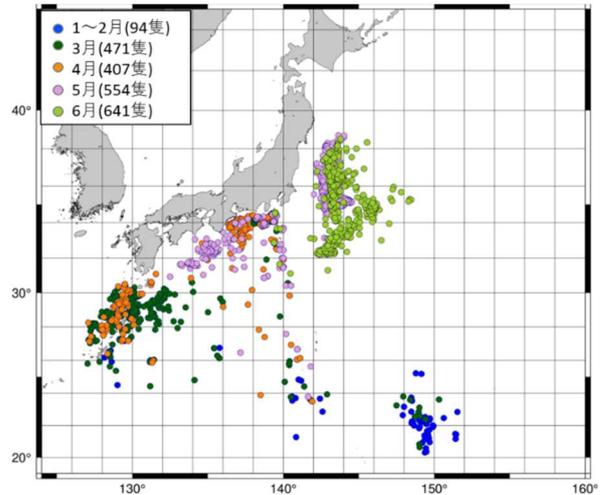


図 20. 2023 年 1～6 月の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体)

前年は伊豆・小笠原列島沿いルートを北上すると思われるカツオ極小の群れがほとんどみられず不漁に終わったが、本年は秋に東北海域へ北上が期待できるカツオ極小の群れが順調に来遊しており、漁獲量から見ると前年より来遊量が多い。黒潮大蛇行は本年も継続しており、1～3 月の伊豆諸島周辺の黒潮流路が本年は伊豆半島より西を北上したため、カツオの伊豆諸島北上ルートの水温が 3 月は 20℃程度まで上昇した。このため、カツオが伊豆半島周辺まで北上しやすい海洋環境となり、順調に来遊したとみられる。

1～6 月の全国の釣りによる生鮮カツオの水揚量は 10,664 トンで、過去 4 年平均の 92%だった(図 21)。2023 6 月には近海竿釣り船はビンナガ主体の操業となり、カツオの水揚量が伸びなかった。全国月平均価格は 395～456 円/kg の高値で推移し、不漁だった 2020 年に次いで高価格が継続した(図 22)。1～6 月の全国のまき網による生鮮カツオの水揚量は 4,173 トンで、近年では比較的まとまった水揚量となった(図 23)。全国月平均価格は 380 円～450 円/kg で竿釣りと同程度で推移した(図 24)。

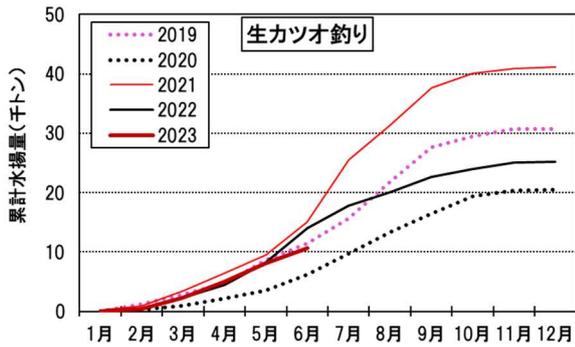


図 21. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別累計水揚量の推移

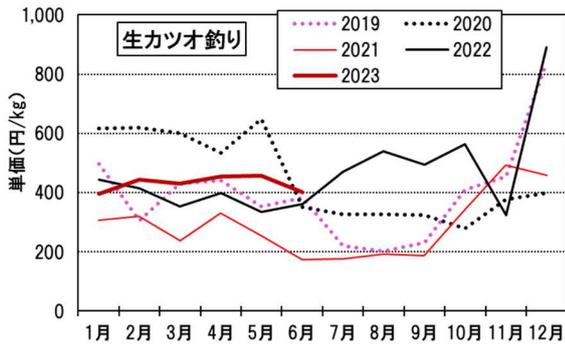


図 22. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別単価の推移

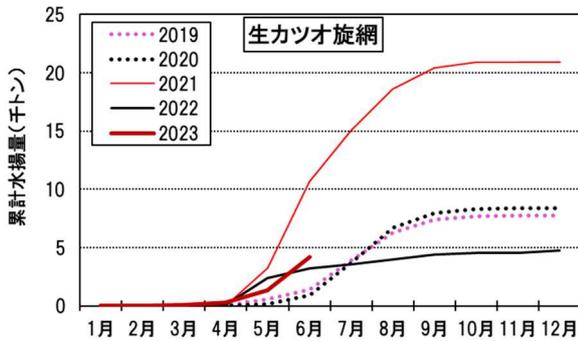


図 23. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

東北海域では引き続き黒潮続流が接岸気味に北上する見込みで、カツオ漁場は比較的沿岸よりに形成されると考えられるため、秋には1日物の新鮮な戻り鰹が期待できる。

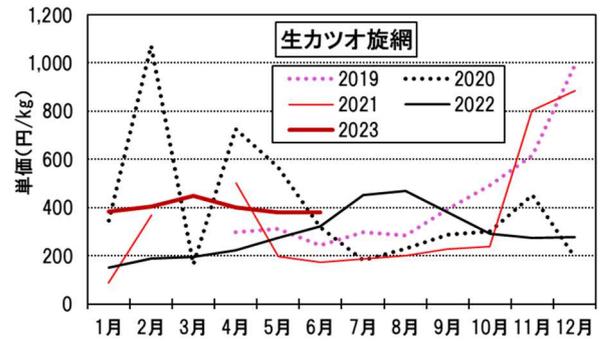


図 24. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

(水産情報部 水野紫津葉)

(5)ビンナガ

5月中旬から近海竿釣り船によるビンナガ漁が本格化し(図 25)、房総～東北海域に漁場が形成された。前年同月は房総沖の漁場は遠かったが、本年は黒潮続流が房総～東北海域に接岸気味に北上し、5月下旬には岩手県釜石沖まで北上した。特に黒潮続流の海面水温 21℃前後の海域でビンナガが好漁だった。

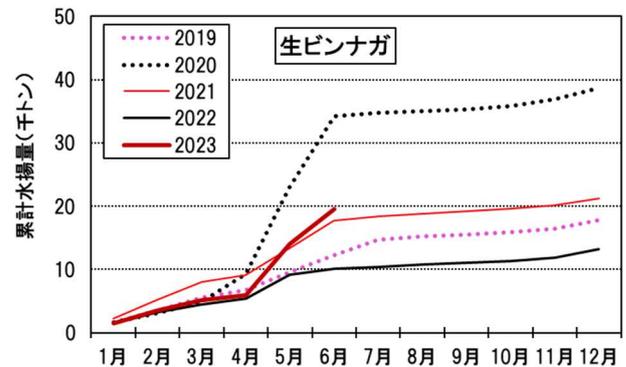


図 25. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

竿釣りによるビンナガの主要な水揚げ港である気仙沼港に漁場が近かったことから、水揚げが活発だった。6月は5月と同じ海域に加え、房総南東沖でもビンナガ漁場が形成され、気仙沼港や勝浦港中心に水揚げされた。全国の生鮮ビンナガ(全漁法)の1～6月の水揚げ量は19,545トンで、不漁だった前年の約2倍で、好漁だった2020年の約7割だが近年では好漁だった(図 25)。

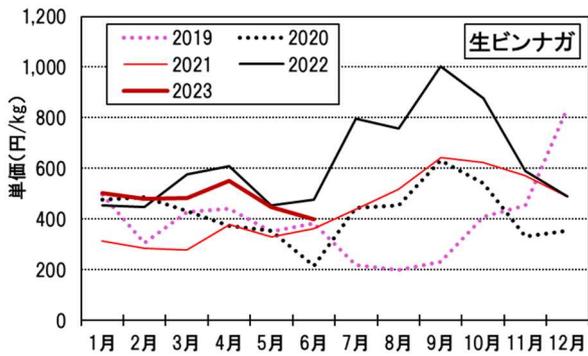


図 26. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

全国月平均価格は 1～5 月は 448～551 円/kg と高値で推移し、不漁だった前年並だった。6 月に入ると価格はやや落ち着き、398 円/kg だったが、近年では高値だった(図 26)。前年の不漁を受けて本年のビンナガ漁は不安視されていたが、春先の和歌山県のはえ縄による水揚げは好調で、初夏の竿釣りによるビンナガ漁に順調に繋がったとみられる。今後は、7 月頃まで竿釣りによる水揚げが上積みされる見込みだ。

(水産情報部 水野紫津葉)

◎トピックス 本年の気仙沼港におけるビンナガ水揚げ状況

宮城県気仙沼港は生鮮ビンナガの主要水揚げ港であるが、房総勝浦港や紀伊勝浦港に比して水揚げ量の年変動が著しい。前年のビンナガ不漁を受けて、本年の気仙沼港への水揚げ時期や水揚げ量が注目されるなか、近海竿釣り船による気仙沼港への初水揚げは 5 月 16 日となった(図 27)。



図 27. 気仙沼港へのビンナガ水揚げ風景(2023 年 5 月 16 日、JAFIC 気仙沼出張所撮影)

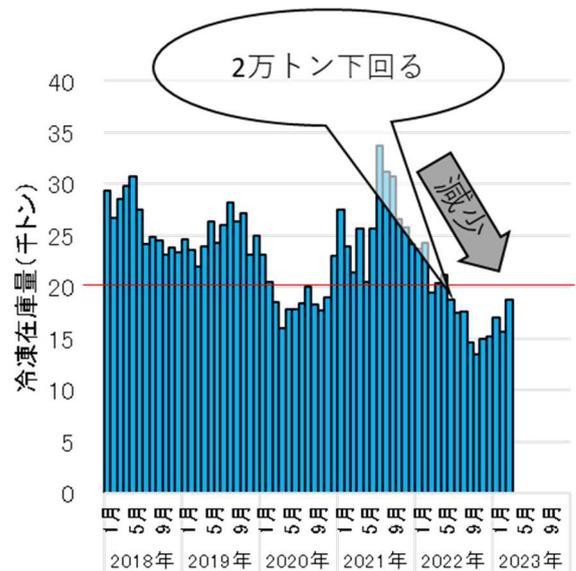


図 28. 2018 年 1 月以降のビンナガ冷凍在庫量の推移(官公庁統計)

例年よりやや遅かったが、漁場が比較的近かったため、5 月下旬から気仙沼港への水揚げが急増した(ビンナガの項参照)。気仙沼港における 1～6 月の累計水揚げ量は、7,908.5 トンと順調で、他の主要水揚げ港の千葉県勝浦港 3,071.4 トン、和歌山県勝浦港 4,071.4 トンを上回った。気仙沼港におけるビンナガの月平均価格は 1～4 月は 363～504 円と高値で推移し、その後水揚げが本格化した 5 月も 460 円/kg で、近年同月の価格を上回る高値を維持した。ビンナガの冷凍在庫は 2022 年 10 月～2023 年 3 月は 2 万トンを下回り、前回不漁だった 2020 年並の低水準だったことから(図 28)、在庫確保の動きがあり、高値基調となったとみられる。

(水産情報部 水野紫津葉)

(6)スルメイカ

生鮮スルメイカの全国主要港における本年の 1～6 月の累計水揚げ量は 1.9 千トンで、過去最低であった前年同期(3.8 千トン)の 51%、2018～2022 年同期の平均値(5.2 千トン)の 37%であった(図 29)。本年 1～6 月の生鮮スルメイカの価格は、概ね前を上回る高値で推移した(図 30)。

日本海に分布するスルメイカの主群である秋季発生系群は、九州西岸～山陰沖で秋季に産卵し、例年 5～6 月に日本海を北上しながら成長し、生後半年で能登半島沿岸の小型いか釣り船の漁獲対象となる。この時期の水揚げの主体となる金沢港の 1～6

月の累計水揚量は 0.2 千トンで、前年同期(1.4 千トン)の 14%、2018~2022 年同期の平均値(2.1 千トン)の 10%であった。

太平洋側に分布するスルメイカは冬季発生系群が主体である。本年 1~6 月の三陸海域の水揚げは前年より好調であった。主要港で見ると、底曳網主体の石巻では 440トン(前年比 380%)、八戸では 120トン(前年比 138%)であった。下北半島の小型いか釣り船による昼いか漁も出足が好調であった。今後、太平洋側の冬季発生系群の漁獲が期待できる。

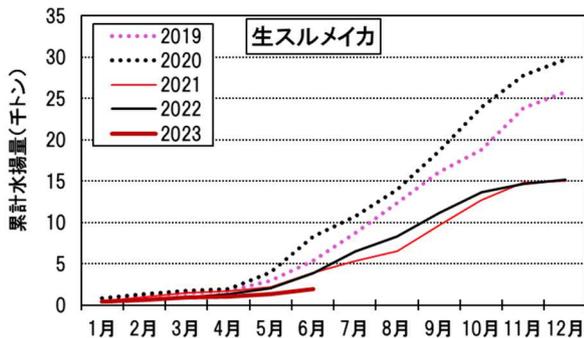


図 29. 2019~2023 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

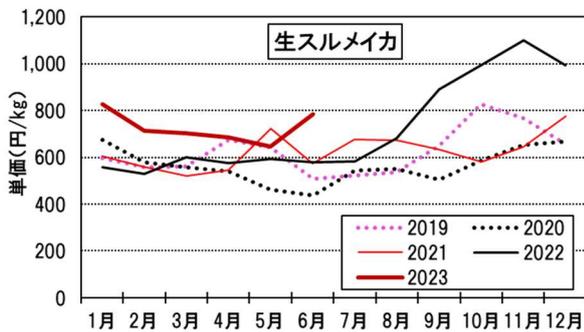


図 30. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

中型いか釣り船(冷凍)の日本海のスルメイカ漁の漁期は 5 月~翌年の 2 月末で、3~4 月が禁漁期間である。不漁が長く続いたことや燃油高騰の影響を受け、出漁しても採算割れになることから、近年は、出漁を 6 月に遅らせ、終漁を 12 月前半とする船もみられ、漁期が短縮傾向にある。青森県を主体とする中型いか釣り船(9 隻)は、本年 1 月初めに三陸近海の冬季アカイカ漁にしたが、群れが薄く低調だったため、日本海の対馬東沖に漁場を変更し、小型いか釣り船に混じってスルメイカ漁を 2 月末まで行なった。

本年上半年期の冷凍スルメイカの水揚量は 0.3 千トンで、前年(0.5 千トン)の 65%、2018~2022 年同期の平均値(1.0 千トン)の 31%であった(図 31)。本年 1~6 月の冷凍スルメイカの価格は、不漁を受け 2020 年を上回る高値で推移した(図 32)。

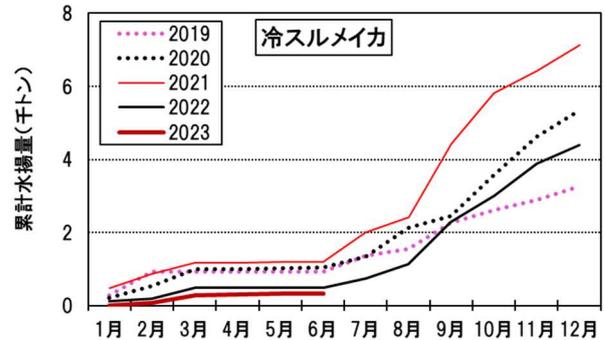


図 31. 2019~2023 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

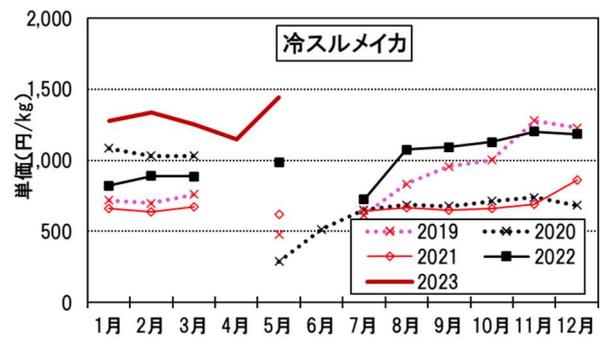


図 32. 2018~2022 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移

(水産情報部 谷津明彦)

(7)アカイカ

本年 1 月初旬に 9 隻の中型いか釣り船が三陸近海の冬季アカイカ操業に出漁した。しかし、群れが薄く十分な水揚げ量確保には至らなかった。5 月中旬から八戸を主体として函館および小木の中型いか釣り船 24 隻、大型いか釣り船 1 隻の計 25 隻が北太平洋西経海域に出漁してアカイカ操業を開始し、7 月現在も操業中である。近年、日本海でのスルメイカ漁の不振を受け、北太平洋でのアカイカ夏漁への出漁するいか釣り漁船の隻数は 25 隻前後で安定している(図 33)。

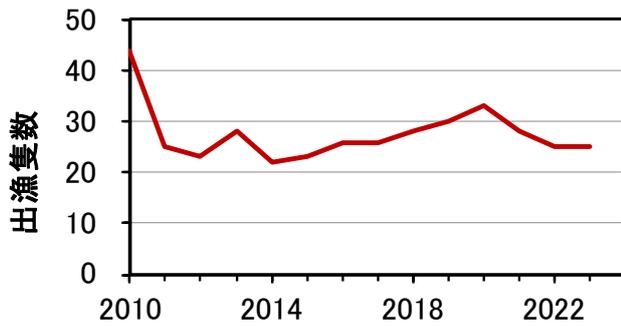


図 33. アカイカ夏漁の中型いか釣り船を主体とした出漁隻数(大型いか釣り船 1 隻を含む)の推移

今期に北太平洋西経海域に出漁した中国のアカイカ釣り船の隻数は 15 隻で、7 月現在も操業中である。中国船の出漁隻数は 2020 年には 50 隻を超えたが、ここ数年は減少傾向にある(図 34)。

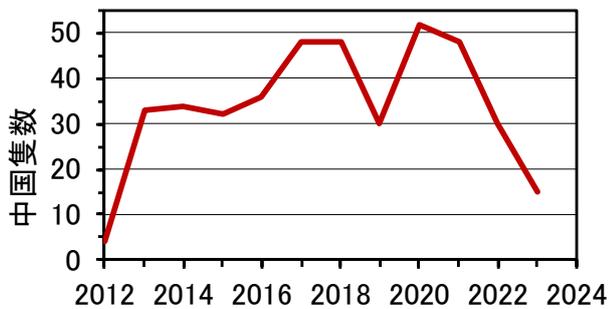


図 34. 北太平洋西経海域でアカイカ操業をする中国船いか釣り船隻数の推移

(海洋事業部 酒井光夫)